

「 OD錠は脳梗塞患者さんの良きパートナー 」

静岡県立大学 薬学部 臨床薬学大講座 実践薬学分野・大学院薬学研究科 教授
並木 徳之 先生

〔講演要旨〕

主薬、規格が同じで、生物学的同等性が立証された製剤であっても、治療効果が異なる製剤は臨床では当たり前のように散見する。治療効果を左右するのは最終的には患者のアドヒアランスであって、如何に優れた薬剤であっても服薬不履行が多い患者の場合には当然のことながら治療効果は期待できない。服薬不履行の根本的な原因は患者サイドにあるが、製剤の工夫で改善できることも山積しており、とくに製剤技術を駆使して臨床的機能性を獲得するための製剤開発に大きな期待を寄せている。臨床的機能性とは、「期待する治療効果が得られる可能性を高める製剤特性」のことで、内服薬ではOD錠がまず具体例として挙げられる。

2010年4月に抗血小板剤においても本邦で世界初のOD錠が臨床投入された。脳梗塞後遺症患者は概して嚥下機能が低下している場合が多く、しかも疾患背景から服用する薬剤の数も多くなる傾向にある。このような患者は薬剤を一つずつ摘まんで服用することが多いことを考えると、例え1薬剤であってもOD錠化される臨床的意義は大きいと考えられる。さらに脳梗塞後遺症患者の誤嚥性肺炎は最も危険性の高い合併症と考えられ、錠剤を水で服用する時こそが最大のリスクとなる。しかしOD錠であれば直ぐに溶けて泥状となるので、誤嚥性肺炎を誘発するリスクが激減し安全で確実な嚥下が促されると考える。さらに脳梗塞は再発率が高い疾患であるが、この薬剤で楽に嚥下できればアドヒアランスも上がり、治療効果の確実性も向上して、再発が防止される確立も高まると期待される。このような点に、臨床的機能性があると考ええる。